

G・M ろうにやく 老若探偵 ジィマゴ

私のじいちゃん
は、優秀な警察官
だったんだって



私は星川留美
高校生



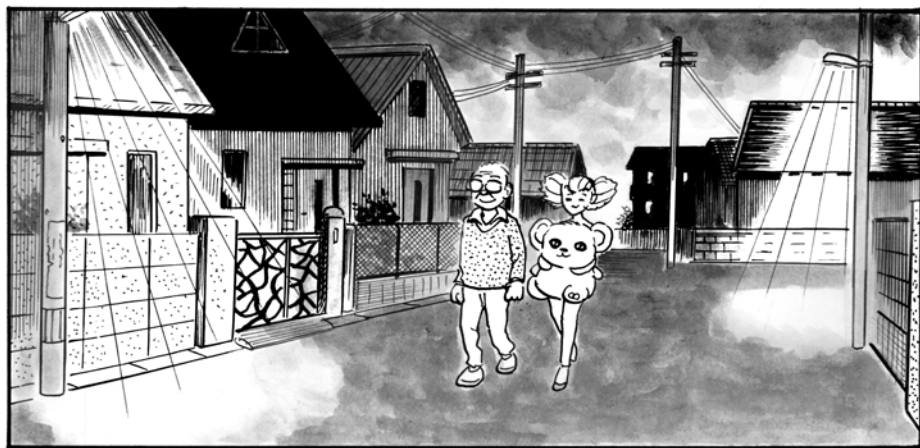
おじいちゃん

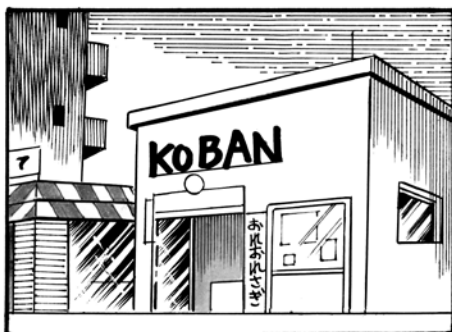
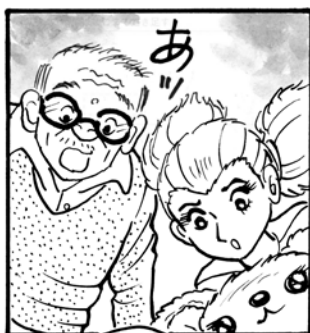


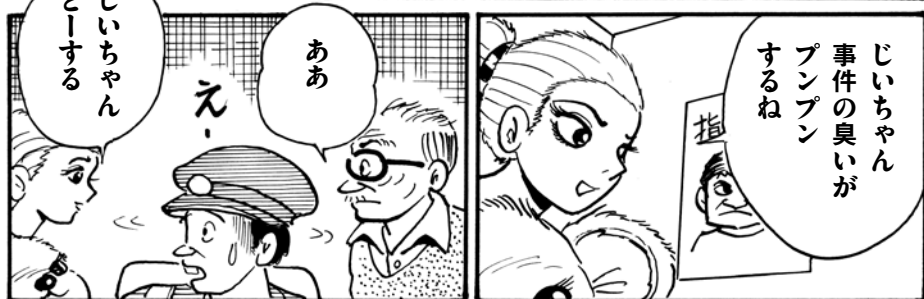
それで
いいの

じいちゃん
誕生日の
プレゼント
ありがとう

この二人
ひよんな事から
ある事件に巻き
込まれてしまった
のです

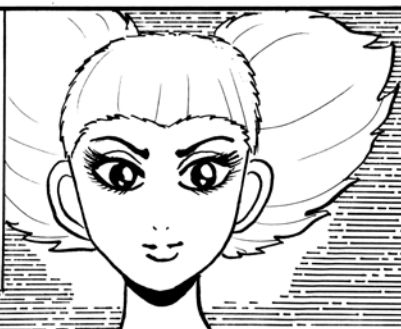






実は留美には
特技があった

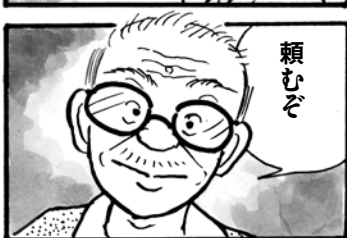
それはイメージした
人の足取りが頭に
浮かぶという
不思議な能力だった



じゃあ
じいちゃん
やるね



頼むぞ



留美は目を閉じ
何やら言葉を
唱えたのです

.....



二十分前
留美に見えた
映像である



三十分前

やだー
たすけてー



おまえが
やるんだ

四十分前

これ私が
やるの？

ああ
そうだ



上からの
指示だ

これって
無差別殺人
計画では
ないの

ああ

私には
出来ません

組織の人間なら
やるんだ!!

組織は
世間を混乱
させるだけで
人殺しはしない
はずでは?

方針が
変わった
のだ

やです

おい
まて!!

麻酔針

お願いこれを
警察に届けて

留美が見た光景を
じいちゃんに
話した

早いところメモの
解読をしなければ

スマホで撮って
おいて良かった
じいちゃん見て

今度は
じいちゃんが
紙に書かれてある
暗号を解いてね

ああ
頑張っ
てみるよ

じいちゃんは昔
警察で暗号解読
の専門家だった

お分かったぞ
これは無差別
殺人の実行計画だ

でも実行を
拒否した女性は
病院にいるから
大丈夫だよ

日時は九月十日
午後四時三十分
場所は〇〇だ!!

いいや女性以外
別の奴が実行
するかも知れん

そうね

